黎明館企画展

蒔く・穫る・耕す
―かごしまの農具―

令和2年 9/8(火) ～ 令和3年 1/17(日)　3階企画展示室　好評開催中

鹿児島県は、現在では全国有数の農業県として知られていますが、薩摩・大隅地方の大部分はシラスに覆われており、かつては農業生産性の低い土地柄でした。また、台風の常襲地帯でもあるため、かごしまの先人たちは厳しい自然条件の中で、農業を営んできました。

こうした自然条件のもとで、これを克服してきた先人たちの汗が民具としての農具に染み込み、知恵が詰まっています。

本企画展では、一年の農事サイクルの中から、耕起や整地に関わる「耕す」、作物の播種や植付に関わる「蒔く」、収穫や脱穀に関わる「穫る」の三つを柱として、これらの農作業に使用された農具の使い方、農具に込められた知恵と工夫を紹介し、かごしまの伝統的な農業の営みに迫ります。

農具をとおして、自然と向き合った先人たちに思いを馳せ、かごしまの農業を見つめ直す機会としていただければ幸いです。

企画展関連イベント

●学芸講座（企画展解説講座）「蒔く・穫る・耕す農具」

〔日時〕11月15日（日）13:30～15:00
〔講師〕黎明館主事　小野恭一
〔会場〕黎明館2階　講堂（定員125名）

※事前申し込みの応募期間は終了しましたが、応募数が定員に満たない場合、空席を対象に先着順で受け付ける場合があります。

●展示解説

11月21日（土）、12月6日（日）、1月10日（日）
〔時間〕10:30～11:10
〔会場〕3階企画展示室（常設展示入館料が必要です）

一年の農事サイクル

「四季耕作図」に描かれた場面と農具を読み解きます。

木摺臼（きずるす）による籾摺（もみす）り

雲谷等顔筆　四季耕作図屏風

唐竿（からさお）による脱穀

県内全域の農具 113 点を一挙公開！

耕す

短床犂の普及以前、南九州では主に長床犂が使用されたと考えられています。この犂は、背を丸めた猫のような姿から、ネコスキと呼ばれています。

さまざまな形の鍬。その形状（刃の長さ・幅、柄の長さ、柄と刃の角度など）は、使われた地域の土壌や鍬の使い方と深い関係があります。

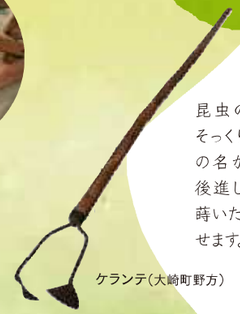
ワタイモガ（鹿屋市下高隈町仮屋）

ミズグイマ
（薩摩川内市（旧川内市）陽成町）

水車の上に人が乗って足踏みしながら水を汲み上げます。

ナカヒキ（源五兵衛犂）は、引きながら後退して、畑の畝間に穀物などを植える条を作ったり、土を左右に分けて中耕や土寄せを行ったりする農具です。

蒔く



ケランテ（大崎町野方）

昆虫のケラの手にそっくりなことからこの名が付きました。後進しながら引き、蒔いた種に土をかぶせます。

素朴なつくりの中に
機能性を備える知恵が凝縮された農具

穫る

芒（のぎ）を落とすサシ。地域によって型式が異なります。

（西之表市現和）
サシ
（屋久島町（旧屋久町）栗生）
（薩摩川内市上甑町平良）

足踏み脱穀機
（鹿児島市宇宿町）

センバ
（西之表市国上）

より多くの収穫物を効率よく脱穀できるように発達しました。

農具の回転構造は、現在の農業用機械に応用されています。

クダ
（与論町茶花）

※掲載の資料は全て黎明館蔵